はじめに　　－2000年に想う「時間」－

時の流れには、始まりも終わりもないはずだが、2000年という言葉を聞くと、これから何かが起こりそうな予感がするから不思議である。そこから物語が始まる。時というものに切れ目を入れて、時間の区切りを意味づけるのは人間である。時の区切り方、意味づけ方によって、ものの見え方が変わる。

ミレニアムという、今まであまり意識されなかった時間の単位も、ものの見方の変化とかかわっている。一日、一週間、一年という生活の単位、十年という人生の単位、百年という身近な歴史の単位ではなく、千年で区切られる時間は、人間が生きられる実体的な時間をはるかに超える。単なる数字や記号としてではなく、実感をもって想い浮かべるには、想像力がいるから、ふつうはなじみがない時間の単位であろう。

今年は、ミレニアムという言葉のおかげで、千年という単位が妙に生々しい時間として感じられた。突然、千年前と現在がひとつのパースペクティヴのなかでつながったような、平安朝からこだまのような悠久の音色がグォーンと響いてくるような、不思議な感覚が生まれた。同時に、これから先の千年という、気が遠くなるような歳月がスタートするのだと想うと、気持がひきしまってくる。

ふだん日常生活で使っている時間の単位は、どんどん短くなり、しかも加速している。インターネットで遠く離れた外国の人々とも即座に何往復もやりとりが可能になって、1日返事がないと、「遅い」と感じられる時代になった。遠くで起こったニュースもすぐに映像で生々しく伝えられて、その日のうちにシンクロナイズし、同じような犯罪が異なる地域で同時発生する。事件がおこると一気に報道は過熱し、過激な聴衆の意見がどっとファックスでテレビ局に寄せられる。しかし、また、あっという間に忘れられて、数か月後には「ああ、そういうこともあったね」と、まるで10年前のことを想い出すように、しらじらしたムードになったりする。

人間がつくったはずの時間の刻み目がどんどん細かくなって、勝手に加速され、人間の手のうちからはみでて、誰もコントロールできなくなりつつある。ますますデジタル化する時間という王様に、人間があわただしく支配される生活に歯止めがかかりそうにもない。そんな予感がする21世紀に、ミレニアムという別の時間単位がもちこまれるなら、意味づけ方によっては面白いかもしれない。

昨年、私は、時間にかかわって、印象深い二つのフォーラムに出た。一つは、広中平祐先生を中心として山口大学で開かれた学際フォーラム「時間と時」である。哲学、経済学、美学、心理学、文化人類学、歴史学から、生物学、地理学、物理学まで、文系と理系の両方にまたがって、その分野の第一人者が「時間」について発表し、熱い討論がくり広げられた。一瞬の「間」という心理的時間から、生物の体内時計、進化の時間、生態系の時間、地球生成の時間、宇宙の時間

までが議論された。同じ世界に生きていながら、時間軸を変えると、まったく異なる世界が見えてくる。それぞれを個別の学問分野として、ばらばらの知識にするのではなく、いくつもの異なる時間軸を併存させて、ものを考えていくことの重要性を知らされた。

もう一つは、ジェネラティヴィティ（generativity）概念をめぐって開催された「世代継承性の危機と将来世代に対するわれわれの責任」国際会議であった。エリック・エリクソンの息子さんの社会学者カイ・エリクソンさんが、「私たちが投影できる時間的距離は短いから、５万年は大丈夫という机上の計算をして核廃棄物を地下に埋めて無かったことにするのは危険である。人知の許す限り廃棄物を地表に残し、私たちが考案できたよりも優れた知恵を生み出すかもしれない将来世代に希望をかけたほうがよい」と語られたのが印象的であった。長すぎる時間軸は、機械的になり、人間のリアリティやアクチュアリティからかけはなれてしまう。地球の未来を考えたときに、子どもの世代や孫の世代だけではなく、まだ生まれてもいない将来世代（future generations）にどれだけ想いをはせることができるか、私たちのイマジネーションが試されているようであった。

昨今は、「子どもたちが変わった」「教育はこれでいいか」と、緊急性をおびた教育改革の論議がさかんである。小学校も大学院も、幼児教育から生涯教育まで、めまぐるしく新しい改革案が提出され、さまざまな改編が提案されている。教育改革は、もちろん大切なことである。現状に安住するのではなく、時代に合わせて即座に決断・実行するアクションこそ、新しい教育に必要である。

しかし、教育には、とりわけ長い時間軸が必要なことを忘れてはならない。教育は人間が育っていく営みであり、人生を生きる行為である。生きてみないと、時間をかけないと、何が良くて何がよくなかったのか、簡単に答えは出せない。千年とはいわなくても、何十年、何百年を見通すような長い時間軸、大計を立てて人間を育てていくことを考える必要がある。

長い時間軸でものを考えるということは、長期計画を立てて、その予定通りに、計画に合わせて人間を育てることを意味しない。逆である。長いあいだには、現在の地点では予測できないほど変化してしまうだろうと想定すること、柔軟に変化する人間像を思い描くイマジネーションが必要なのである。

高齢化社会を迎えた今日、教育を、生涯発達、生涯教育、世代間コミュニケーションの視点から考える意義は時間軸の変革にかかっている。時代の変化が急速で、先の見通しがきかない時代であるからこそ、大人になるまでに知識や技術を習得して完成体になる人間ではなく、大人になってからも学びつづけ、創造的に変化できる人間を、じっくり時間をかけて育てていかなければならない。

2000年３月　　やまだようこ（編集委員）